誹風柳多留 四十二編

へ9
1147
40

帝國圖書館藏

40

へ 9
1147
40

世老や身をかなして思ふ
あらぬ事なるゝ小林寺よりあ〳〵
俗〳〵る利の旬ばかりなりし
毛秀逸至第毎年こゝろ
〳〵おつこめるを高問話交毎
四十一の年とたゝ　芽裏が
ゝ　戊辰春

玉章評

林の中でおさへる戎御獻上　吉露

百成も上野へ芝を捲く蓋キ　吹雪

籠龜のいくのい初乃節句之　吉雪

長狸屋戎毎日のぞく吹屋姫　永乐

藤生しく指ゆ秋を祝しう　孫川

大黒を出てくとん母戎おさへう　梅雪

本小竹でもそのゆ屋きたづ色　孫川

手中子氣とりで國を家老立　芋洗

柳四十一ノ二

貴朝と持笑兩で智恵が付キ　柳面

大きれも白イと若の石でおよし　百吉

北星ハ立夜三分ハ光アリ　散花

月の場戎逃ルハ水が出ヲ有り　集言

青よりも白ク紅ハ紅色　吉屋

唐柳子と廉小平場屋ちを吉　吉雪

小酒を手の下ク嶋ハ出し　孫川

屋脊井戎ルハ善光彼が記へ　里松

宜士が坊ゴリ南風吹イてきん　菱表

青屋が助云入り王稽ヶ浦より　雨上
年當の事で伊宮北仲宮に　やぢ
神口と扇を持つて来きし　去弱
正月の法ぢみ異本が初つて　やぢ
又く其日を歌人の世イまを合せ　里程
鞠の金ぐりと流して来きん牧　作威
時宗い拾ふ紙感ひて為　門柳
あるいて坂さんだよのふて花の形　孫川
伏せ玉の未第わ嫁ひまる形り　仝

御四十二ノ二

本月度の寄り年号丸屋さち　やぢ
引宴其事ふ本年るむつのくふ　芝東
元の時方人ほ玉ぐ〜ぢ〜しん　中布
嫁け祿病とい天八を年ゆる名　京東
芝下い君そぐ〜金をうけ孫之　孫川
四書をたくいよ東大全球くん　仝
月星の方宮月の月を星子ぐ　仝
新〜女子其病さまを拾ん其ぐみ　仝
吉ゐ八人せりの方年ゆ〜乳ぐ　仝

まことのあくにんなれども
十六の時婚姻をなし　家督相続
婦のこれをうつく松永婚ちと旦
血脈ふるひ〳〵家敗あつかける
夏ごろ家相をまぢく市二日
後ロくまを孫いぶ毒毛結
ちゝ寄ちんちゝとおして屋
女湯ハ汐干博いるりまま
きたのてすわり出〳〵ふ仕ち井戸屋敷

柳四十一ノ三

里松
孫川
春灸
里梅
長角
門柳
里松
春雨
横死

敵ハ瓜子ハ城鬼　火球　槍し
傷者のてん婚ら清王接へ
木像ハ婚ハ陽屋のぬくあ
ひびてすの乃ゑざなく四十六ノ形
金毛〳〵付ろいきぶの河原娘
婚〳〵ちさ取掘ちゝ梅毒ハ村
上ハ絵書キ張日向ある仕ち
武合ち　奴うち前きれ
関ケ原脈〳〵ふ仕〳〵と形ち

芋足
灯崖
眉毛
為後
三松
荒声
芝蘭
木契
里梅

主越なの屋門丸めつ安イ者　牛賀
第門ト立ッ少球ちる福の神　仝
夜長の書ちん〳〵ふるけちゐ　梅川
むゝ変ゐかりとなりよくなる時らの度　西丘
拵分して身の度ふらたまさ也　牛不
十三番ハきゝ七人筋小天下也　義度
阿まり相ちゐさ嫁で引ちなす　茅義
金銀をちして寺ふ下ち物案　昭庵
大晦日皆の病でうあつてる　梅川

杵四十一ノ四

ちゐとんの金芳所乃大一度　シクト
帖いちと物うまるへうみ時き　梅川
投ケ入の紙〳〵びて居ハちゐへや　志夕
人当ゆてハちれ阿〳〵ど芳は嫁　和雀
元をつ時〳〵てハ甚場ゐつ後　和歌
俳優ハ元ざして乗ちとち物を樹　芝屋
自然生徑ハ涙ら七長百丘那　雨丘
ちがりつとなる〳〵ハ井のちき　楼好
み嗜ち徳ハ門ちろどかまど　西夕

[illegible]川は酒やで面人　　新乗
陰陽がぢきに鼻がもとる　　芝蘭
弓削村で面う中に奇の子ゥ生し　　保川
ちとら問言をのを下女のまけ　　やは
酒やの伴則に長人ふうばいをも　　ア私
ちかてこふうしがきんて大ちん　　条角
乗んで蝶とび飛る酒黄書　　散売
下女ゥ恋ゥをとゞかに思ひつゝ　　保川
陽ふ婚ち法ふ法ゥて出来ゥ　　九鬱

川柳評

寅の月千代を抜せ丁松と弁　　マイ女
天帝へ仏法ゥ乃法告文　　玉章
梁ハとも美本ゥ猪ゥ丁り　　寿鶴
由年社のあゥ人孫を埋ゥふ　　九鬱
立ゥ丁蝶郭端も月の名取ゥ　　牛蛟
ちゑ丁ゥと忠義ゥ立紀玉章書　　保川
陣中てゥ小ゥ時ゥ丁ゥ猫ゥ　　西夕
信玄社郎ゥてゥやゥる弦弱の弁　　玉章

晩を接て月なれども雨
安倍戒破り能因一生涯を
終りて頃八優婆夷小三年成
仏亟がるの地獄阿鼻大地獄
責目不とは云へ柳の色
殺り〳〵梅の花の香
書時で諸仏を先陳福少
梓亟日傘故市小自分用
下駄がけ〳〵行者

友尾
丞壹
里松
如花
喜弱
和茶
未完
改書
秀良

柳里人六

小辰八至故三分は光りあり
八十歳大るの労て築とする
信云八加月を拘を目は歓
音楽の中へ門完のなること
女房八なのをんなるなり
皿の音音主産後て見せき
桃華で美羽を人りう呑んだ
百日西て没まると息子出る
十三歳八まで人筋小て下筋

散花
玉春
仝
仝
著吏
西丘
吹屋
保川
美後

王と約束を一ト車引く来る　養恵
出家してのち医者となり接　里松
見物のうげへ法名むぐりてを　如意
きれうふうとての作ゆる　横好
三十一相撲さのい小町　楊弓
関ヶ原めんくハ杖を折きる　里楊
京中皆悪こんだを殿好し　横好
代里へ流きく来とハあの年　横山
血眼さかりて系図遡りける　里楊

江戸のたりちきりゃうけて　玉章
仁和寺人清物師を弟科る　和泰
金箱を付るい病内ある娘　三松
三舎自あてあらうつなくめ　孫川
死せる平人大名をきしむ　水賀
刷くれく麝くやく後京作り　青家
やぶれて温袍を着て母小盗　赤乗
松永が元侯袖と裾を崩め　横山
横め留を内へも出のをんうつき　三夕ト

雪隠で未練出しきる下手将棊　孫孝
よし金子出入小かくまいは道　ミツ卜
鎌倉らうの子繁りハ初松魚　吉寿
大井川でハ渡しの無いはからぶ　了私
国家老毒殺棚にとをくみ　樸飛
公家悪ハ一服もるく野暮を云　志夕
胤まで伏勢が出る人　扇橋
驚ろちん家女房安云て本前出　吉波
何の音メとさかれハ門女　眉也

猪の首も肉みかやくて懸り食　巾布
キカイが上へハ針遂小牙をまりせ　樸好
外面ハ菩薩母肉ハ女房之　散亮
婦慈のかまんどのと云種　巾布
大夫日出る勝手さめいかし　マイ夕
彩田ハ式尊帯ぐらめ法事指　万仁
兆猴兎学めうと田の喧嘩之　吉寿
附合ひ女房入るぶかり志れ出　孫川
田小柄ハなへさしとまちゐお　空

衣のとてくわらびてたんすあ　醉所
第礼の芝の豚をくくゝ下ふ医者　万仁
硬蓋出るよりまつく寒而もる　五嘉
ぜひ留るサア茅を出せ　孫川
下女色牙兵形の外さまり　赤糸
仕付芋の形て分ハものゝ　孫川
堅恵の四字ゝ大ゝ庚申云　書史
かけ賞ふかちい指ゝ動き　面夕
巣くゝかしぐきりて大笑イ　魚角

屋ハ高介ゝの麦を貸イ　雨且
供揃り待ふ二穂くゝりつけ　本賀
屋敷新ゝ出ゝ豆を生ッまき　虎声
御ゝ目ゝ出ゝ下女ゝ出ゝ　巾布
ゝ食ゝ食ゝ原子ゝ寸ゝ作ゝ度　面且
新ゝ宮を姫志八まくゝ　秋稲
下女ゝ意ゝ筋ゝ足ゝ　孫川
私て寄ゝ大ぢゝ　老糸
大尾　大けゝの元の花ゝ下女ゝ屋　有昔

マイタ評

天狗さ那を山の名さ多へ　孫川
道の実（マコト）附さあるぞる山狗会　雲鳥
月陰のあけをうぞへる掛ぐうり　巾布
之保が傍あり和を文湖と陰福巻ノ　古彦
弓矢神服うう地山征罪　玉章
武花神示京名付て月の廓　牛奴
日甚の未世さ狗を波乃鼓　谷子
一服ノ二さうう三すの音文百　府橋

四十二ノ十

添之位女を野ちう九分ス　九章
うらうふ稲妻あの雷ケ屋　牛奴
宮也寺の畑ふう人種付ル　和茶
竹と栗和漢名ちイ孝ふ孝　柳面
ちうをうて富士川を国氏城ノ　了種
妻の巣をかりて夜の巣うこ高ノ　雲鳥
秋の雲婚けて少うう小狗狗り　仝
ようぐせふ歳の実ふ月さ四十七　之松
日本うう月本国（ホンコク）の家祝ぐ人へ　孫川

あまるハ物でひと渡しする　巾布
立て祝ざるハ猫の産屋し　眉毛
名のまゝ一ぱで城を持らゝ　シクト
茗荷の物ゝ名ゝるが一変物る　柳西
義経元祖芭蕉と志ゝ　義経
命と魚をうけ西ゝ飯をゝり　三松
よいかをを及吉小志ゝの延武帝　孫川
小見ゝ勇むハ胡るとゝ長子　如雀
秀吉も紙の袋ゝきもをけし　義慶
四十一ノ十一

當形ハ味噌用人の姫なり
西川でゝゝ遠しゝ坊主出来
志ゝ弟ゝゝ人ゝるゝがらなぞゝり
畢ゝうなきちゝ小筆さゝてゝ
一トゝゝげ涙のゝぐゝ涙千の
片ゝ鬢を磨ゝ減ゝている大拍子
生ゝ涙をなゝりゝ
悪や姫らしゝ小ゝ人ゝるゝ
信ゝ左の実ゝ清ゝ

横飛　義経
西夕　角
西形　横好
攻鬼　志高
孫川

一日小十里ばかりふむに雨やむ
柳井沢めくるあらたまりぬ
竜を忘るまじ松の枝でおれ
中ぶぼおもしあんのん実さき
ぞうそも女の宮ぶきまあり
猿の笛なる女房をうぐいすなる
かなぞんす見通人の孫ごなり
破風の外忘れ戻る
春秋を閑金ばかり吟見
四十一ノ十二

志賀
柳百
万仁
五葉
猿山
玉章
柳百
保川
ミノト

雑味噌のけで一さいなる
小生をうつ天狗ハ鼻ぶごろ付き
獅子口へ扇子なる安家中
なんとでもおいなんとつれてり
虚ゝ笑ふ〜後小ぶ付月雲に
郷背ぶ出さと花賀なぞくれる
ぞこ雪で辺ゝくふ小女の宮戸
かへるよ雪さゝとかすひ
いつきあんすいきもゝの仕見ゝ

五葉
谷子
玉章
保川
ミノト
保川
宮崎
横好
猿山

男をもつて人れハ吉とのこ　万仁
万能を一人で買ふ汐やの人世　柳多
小心あり乍て計ハ和ハ能を不能　保川
山ちとあり〻森てりけちゐ咲こ　白雪
居ハいまさ秋暑くいふ身なり　有常
先祖さ勧をさげるけちゐきゆく　吉春
法家老ほんまこあハさせめこ　保川
国家を志ハ〻が極ハ重云ちり　仝
まりハちゐ〻ちりといちかなきほ海　平雅
四十一ノ十三

あちり上ケ恵登稲でもヲ洗イ　和義
れもたちゐ〻ちゐ死ぬ〻ん〻きこ　平柳
諸人でるこ脳肝ぐ〻ハもゐ素　柳春
鍵ちにきんてこちをてこ刈てちり　柳雀
いこ〻稔ちこい秋の居ハ　柳西
七人を井戸場こ〻ハ知恵　柳雀
ハきこ〻のちりバ昌のかぐけこ　集雪
花咲のこ〻ちのこ〻ぐき云葉也　保川

川柳徒

法服の黒百本さまくり　西夕
洋人の後ハ[illegible]人まて七まつ　古雪
一ヶ不二と云へと是ハかゝ[illegible]　古程
明石ハ頃ヶ[illegible]武ヶ入　三松
言縄さまくしめ[illegible]しき刀脇指　三ケ
ゆくゆく所を[illegible]やと大[illegible]　五素
形紙堂と[illegible]時ハ岩朱　笠山
三ッ茶ゝ出し[illegible]　志夕
一下りゝ什涙の[illegible]　西杉
四十一ノ十四

屋よりも一ヶ目法イ國家老　三ケ
多を[illegible]平[illegible]院のもの後　中布
あるハ物でゝ家しも　仝
木牛も伸迷ゝ[illegible]　横好
環花を頂めき[illegible]　や程
縁のたゝ山寺まてそのゝ大さ記　保川
ゝゝ武[illegible]男人せニヤアと[illegible]　五要
何ゝ中のゝ[illegible]ハ姫[illegible]　中布
ゝゝ勝手清[illegible]姫子男小袖

呂后でも毒ゑうが[illegible]
その函は夫婦つれてよわくて
きのふ称一四ゆで塚を持こて
寿と毒ゑ命と思いつり金び
丸山の祇園 新[illegible]
板のうしも田長名を付きる
大黒のうさぎを二ツ与せ
るつりを知ても思ふこと
逃亡ものの[illegible]と美んだる

平一八十五 瑞夜

竹崎
長夕
シクト
長夕
長乐
角角
和花
三長

横ハなれのよして投打をて
考りさ茶の湯へ身をあげる
沖釣り心肝腎の糸乃豚
小辰さ命ゑ元星さを飛び
詰んでるふたいんで下手形素
房事さいあんのふりさ女房ぬき
ふりれいさるきげん中沢を杖つき
蜻蛉の今さそを生るあざり
百姓北かた麻さ下をつま

四十一ノ十九

吉程
吉波
郡板
敷売
みを
孫川
みを
里松
全

不屈さるい様に仕て又きにぞ　横好
ゑゝ変サるゆ毎〻写ふ姑だ〻　仝
ゆ亦老苑て接をしゝたとき　仝
い仕業ゆゑん仕迚も横〻寿ら　玉壺
い娘ゆゑ〻ゑ迚ちて歩ゞ〻び　了私
ゆゑ〻ゑ〻ゑ考ゞうつてもちゝつき　孫川
句配のゆゑいたゞきと配禄や云　青史
むゆゑ〻ゆゑづきいゑんも解きめ之　孫川
仕んてゞ〻。ゆ。ゆゑゝうゆゑ　若支

四十一ノ十六

ゆゑ仕ゆゑ者病人〻迚ゆゑゞ　為後
いゑゑ〻ゑ為ゑゝゑゑゑゑゝ者　如雀
居ゑゝゆゑゝ為ゑゑゑゝゑゑ　五青
必ゆれゆゑゆけで和為ゑゝ胴れ　和東
為れ代を残てゆるのゝ神乗生　里松
為ゑゑゑゝ兒つけて配ゑゆゑ　印布
きんゑゑゝゆゑゝら姓為ゑゝ大ふゑ尾　孫川
先組ゆ勤ゆゑゆゑゆゑゝ者ゆ形為　五青
ん実ゆゑゑゝかきんゝ結ゆんも　孫川

ぶきよりの花枝ハ未るのかつらゆ　眉長
翻翻とうつくしなるあんまりさ　笠り
庭のかつらの月なき夏ハ間てさへ　和歌
月不見戎捕へてくれい出てゆく　万仁
里年心見ぶかぶる后の月　孫川
なぐさみかたれいかんぬさけ孫　歌鳥
却さくなら著い地もあ　永乗
色さくふきつきゆ玉ゆ夏　義後
下弓却ぶ俳てくさもわらぬる　長和

四十一、十七

二夕所の三出一よ文の雪　玉乗
文と武よりのはの梅の会　白夕
二天の戸も地の名ちいしぬるさやうさ　孫川
こま巴一のふきやとうんとうを　丸鈴
おもうけのかつてはるさうや姫　柳舟
海色うけ牛ことを帆をうけておい　乗出
かうまき陽きよのうへ人をを　玉乗
作逆ゆ車ゆ屋ゆ宅を上のけ　孫川
何西とうを氏よいとさとのうち　日

十八

ぎりよう山路杖いたるのなりはて
翻翻とうんぬんなるこしあんまりさ
庭のもゝ花月を見ずい間てをなり
万不二式捕へられい出るのこ
里年心見ずしかぶる后の月
なぐさみふとれいあんぬさけ孫
知さんゝ物ならず著い地ものこ
世さまふよりつきゝ中とて玉ず貴
下万知ゝ知ゝさまわらしる

四十一、十七

眉毛　笠り　和歌　万仁　孫川　岩鳥　赤尻　義後　長祖

二夕所の三出一よ文の雪
文と武よりのある梅の花
二天の戸も地のもいぬるこやさ
こま巳一のふるやとうんぬうりを
おもりけのうのてはるさや姫
海色こけ牛こ帆をうけてお
加ちき隠きものゝ人をを
作逆ゝ津屋家二宅をたつあけ
年西よりてはよいとさとのうち

玉章　白夕　孫川　丸詩　柳赤　素出　玉章　孫川　日

右之ゝ人の時と不足なる所ありて
れ人とゝてぞつもるのひんのとき
威風ゝ人くと書世と二人つを
ひ度安の要ちを鶴ゝかなんら
きつい中根ちいゝ長谷川ハ石
役をちくて一和をもあるこの
そのゝ書葉と新ゝ寄てい
當の孤身中の山室室
家名も邪とるゝて海辺

シクト　和熊
芝山
シクト
玉家
孫川
日
横好
孫宅

町用の一ツ氣ゝ山ゝけ
お信ゝ柳を小へむけ
ゝゝ歳ん風信ゝ孤孫鐵
孫のゝゝ自のゝ寄かゝ
九宅ゝ尾ゝまつ一逝去ぬ
施ゝもくて長ゝ人ゝら入り
ゝゝのゝちゝ地主の孫て生ち
之界宅唐内地ハ二タ世帯
尼ゝ一日亡ん下口海浜

山柳
和屋
博浜
ゝ松
長鳥
赤家
玉家
屋松
長浜

[illegible]　五友
同業を二傳てきこゆ　玉敷や　孫川
下ちるぬおのこ三枝くうちち　玉章
近ふ日を　[illegible]　玉章
[illegible]　[illegible]
[illegible]　大傳
[illegible]　百矢
高[illegible]　星松
[illegible]　孫川

桃の[illegible]時を性を稱ハ[illegible]　孫川
[illegible]　根毋
[illegible]　撰好

川柳俳

[illegible]　[illegible]
[illegible]　孫川
三井の入[illegible]　玉章
[illegible]　紙丸

高砂の松ハ伊浪に任せまし　琴我
手と口て隔正水とそのひ　笑山
たかしさ青葉と鉄し露くは　篠川
三宝ハ名のうハ天下一の山　い
勝負し名銭のあけどう太ふに　摂好
浪まもよ恋うけと中市正　篠川
小町もめよいくの殿々たら宝ニ　孫来
玄宗ハ麗殿調了毎ありわ　玉葉
帝ニ沙汰も右まも皆二三人　素臣

卯年十七

大内を植木のつぶろたんとあり　笑山
鉢の縁の裏ハ巴五と田小野　篠川
底鍋ろしいひきくとさ源九郎　笑山
法義場で第一儀の龍をう付き　和泰
目よ立さらら児さまる桂の御市　香臭
同半日形流くうに妬かり　篠川
だろよくと裏盤ハ本荒へかち　玉葉
いつくかもの見ハ水をかへ素まり　渡文
妬の乳姑のおゝるく訴さ　琴我

仲ノ所ニ北の感状ニ長ヲ加ヘ
ありてを長ヲ番川祖にたり　玉泉
喜のをゝ世ゝさの関係ゝの　和泉
びをの西下をゝ知をあゝ　孫川
を原の口ニ出ヲ紙とねは　玉泉
きゝい車移ゝハ長狭門ハ石　〃
こをりの口ハ八所ハ二所　〃
旅の留ヲ草をの板る者ハ　不紙
海辺ニ井ヲ帆とけてハ　シクト
葉宝

弓場と入て寺をとあちある　孫川
なぜくちかゝるゝ　松葉
かゝるゝのた右位の石ゝ　百夕
厨徒ってたて施ヲたつ　シクト
自然ニ郭巨ハ　孫川
先ゝ初たゝこゝゝ　麦焉
毋ヒ一器ハも　笠心
をくり月とゝ　留二
医業のいやを　孫川

氣のよるひるけれども
ちりとかいりて姫をえむ京藤屋
和漢のてんちとそうぞくと傳ちて
火の海て石の燒てるは腸よ
主人おちつきと目薬いまこく
面やとり入もやぬこの世ぞなる
猫ハ仁田よけつの毛をぬうを
樂こそ外にすり女房やれ
ろ鼠ハ主人ちるとるとのを

孤雲
素屋
志摩
怪心
見乘
大猫
兵衛
松亭
素屋

廣屋よ玄うんさ杵　二三年　山崎

ひを茶十日迄てもさるまし　素屋
姑の鳴こうのろふとなてみる　森出
菅の姫東軍中の山室宣　横浜
赤貝ハ近国の鼻ぐらひ生き　志多
おかしいてく菓子と大屋いひ　和茶
門内の井へかつぴまろぐ和尚　菱裏
こをくきの川ともなるうちり　孫川
万男のうハまへ大屋二月ちよめ　和茶

口切と下女口脇へとゑんてら　大隅
村雨へたゞりついて居めさるよ　マイタ
綾うこけ下女をつけ遣ス　林舟
かりろいそぎ下女前を綾ぐゆ　マイタ
辻番のかやぢんとゝんてゐる　又友
沖乐郷ゑきん金二ツ　前　二ツ　松雪
世日を何のかのとそするゑ　孤雲
柳ロ十七廿四

筆のもの、ゆるくを書やうきかり　友裏
ロ今日よまぶみもゑぬいちな宮　梅雪
毒がはえ屋るハ梅上　なり　如花
お花づめが書いこまゑんどくを云　ヤマキ
うぬらこそちしの拾ぶと叩くある　碓川
べふぼくめ又然へこ海女の多　仝
何ち毒拾ハ色ゑんおんサマトやす塚　ヤマキ
九のきんでいんせずあびゞけつゝし　如花

文日堂評

以下千鳥部新たに加はる分

口切と下女口脇とにぎんてる　大橋
村雨へたゞりついて居めきるよ　マイタ
綾うこけ下女をゐうけ逃出し　桐舟
かりろいそぎ下女前を結ぶやう　マイタ
辻書のかやぢんとしんてゐる　丸友
沖乗郷まきん金二ツ　肩　二ツ　松雀
世日を何のかのとそするなし　孤雲
柳口七北四

筆のものゐくを書やらきかり　皮裏
口舎因よまぶみもんぬいちを宮　梅舎
毒が宮屋るハ梅上　北花
お袁づめが老いこまるんどくを云　ヤマキ
うぬらこそちひの指ぶと切くある　碓川
べふぼくめ又炬へこ海女のみ　仝
何ぶち毒指ハ色んかんサマトやす痛く　ヤマキ
九のちんでいんせずあびげつるし　北花

文日堂評

撫子ハ庭で一ト方をかつぷすぎ　未学
大抵ハ白髪まうてこのすまハ〳〵　如雀
あの時ハ氣がそめたよこのや先ゑ　ヤマキ
梅ゝそる月の一ト枝ゞ三歩ん　シクト
二ツこハなゝじゞ寄ゝ沙じ寄　青蘭
二ツこハ大入れもなつ以傳ゑ　雨夕
持場近ゝハ大キナかハづの子　仝
春せつけて氣ゝを望ゝまゝ場　里松
名吉以蔵日坂ト前陽山　玉章

挑キ屋を入れまする男前羯磨　如雀
おやまなゝものゝ沙て富士ゝ如寅　青蘭
以いゝ茶を赤あまの主ゝ婦如寅　雨夕
お茶ねやつゝ沙て天ゝ地さ　仝
遠保をゝもて伝保ハ天てのほし　如雀
ゝもゝおゝ入るハ社ゝ屋松ゝ園　玉章
松ゝ園地寅ハ雪ゝ降りなゝ　梅名
桐沙りの如田河で名ゝ吉し　如菊
大門でいのれ沙去ゝ生ゝぶれ　青蘭

夢をおすこしぢやうにまれら鶯所
前に庭ゞ有るで大川をおもぐらわ　如雀
庶鴻ありよもやぬけどハ伊勢、海苔　玉章
大笑イニメのでハ乳母屋ばかり　春裏
切見せの名よりお百こいきついるす　雨夕
かやつらなふこつかゞで扨お合　ヤマキ
おれが世帝ハおめへらこ大生碎　雨夕
不老不死こあさもすかに生義　ミノト

川柳評　ミノト

雨夕評

伯の江の罪ゝよ乐天寿る乳なり　青嵐
里ゞ始終あつさハ政子なり　箕山
新道先言尾ゝ枝えて糸れ　砥川
いつくちへ抜さゞるかめでさ　如雀
夏蚤をよく〳〵見れば蚤ん　ヤマキ
いゝ子ゝ京まで乳ねぬ戸、町　砥川
をゝとめすで生ゝの涙ゝ　如雀
大根ハ白髪よゝそのゝまゝく　仝

玉の立てこのちいいくひすこ　　武玉
ちうちん。はねこそぎ劉伯夏こな　　孤雲
晴ゐを伝ッハたゐを初る為今　　仝
天子の後ナもせいろう不お来ん　　如花
ゐ〆げ紙ばでほぢく　　孫　　友裏
一ト月もゐるひこうに吹ゝがゞ　　梅香
やく世高小云をこじ文よ云イ　　孫川
打花の用服にで云ちつふき　　孤雲
あつて修乳せまへでを仲人者　　ヤマキ

きしにでかゐんのある伸ゝ断　　仝
手猫をれれろせへと村子仲　　ヤマキ
ちうちつとかをいと五子う先ゐ　　末浮
あゝ笠の問をはかどよえねかゐる　　ヤマキ
桑へこうりをかー巴メと洗花云イ　　和泰
墨田流ちもとのべき琴ゝ杜酒　　友裏
姉さんがりゐハ主居へ炎すへよ　　仝
影道ゞ者のつゝゐりあゝ袖の梅　　孫川
首ゐつりんも紙滑と仲人者れ　　曳尾

声あつ〳〵人こそえへねゆり拍子　砥川
えゝ木ゝまさきの標木あり六ゝのこだ　千久
酒かつて屁をきゝれさやつも孝　青嵐
屁うちできて舞をする料理人　雨夕
かんよんをして三百目蒲鉾をする　砥川
阿波の茶えん茶ぐのおつぎの　仝
火を吹くござると彩遊あてのき　仝
茶のみこいつた角三豆よせば　如雀
ゝつゝこ鶏女のつぎをはなぐ　砥川

孝行さ須弥荼海をとゝあく弥　三作
宮おりのまぐ女もえんず仲ノ町　やまき
まがつてでよしをしるを拭される　萬山
たゝちねハかゝ迎とてしも仕遊藝　友裏
あれんの匹妹のうつゝ　さ　三作
ゝしらのでんぐり子泥まい肩　吉嶋
兄ハ弁妹ハ鳥を吹つて舞る　雨夕
鉢かつり大変さしきいやつこすま　巾布
松浦浮向く言庵ハあうたん　未学

素人は借すこがうだとう巨刷毛　砥川
合羽かこかもや納豆名をあし　玉章
こハさうは猪をのぞく外使　横好
一ケ月もなるしこうは吹きつかり　梅雪
老物はあるハ大きかハづの子　雨夕
三つ星へ切れ猪をつきて書　仝
大川でさう理武者はいけどぶれ　玉章
世帯を持てゐをかまハれる　やまき
さうはんぐ招こうぎ劉海灰こけ　孤雲

如へ玉をひねつて春やなつく　仝
笛をつきねいて母ひよどり　仝
杉さん達奥こころこい切迫に有　やまき
屋ゆさでひいがやまいら　仝
おかしさハ客まとへてむこ有　仝
やいつそ半の扇又まゆ　戸尾
文日達評

清流ひびく蛙の声を聞　百仁
茶でむかしの鼠の尾ハ書は白　玉章

ごつちうも上の字ゆつく　夫地
二十五へ一般ゝ如むき　赤字
豊板よりハまづ〳〵ぬ清　シノト
附弓張月　ヤマキ
百人よりのおもしろ絵　百仁
俳十かいくぢ今ようちう　如雀
松の間笛やの石ゝ見浮　シノト
風風ハ三合れ雀ハナニ文　接好
ゆういるの上へ紙をえ　百夕
里松

てきたいをせぬとあるもく　百夕
松ハつれまいぢ接ハつれがゆり　仝
小蜘ちたきつけ姫をいぶ　ヤマキ
竹内百人ゆ文かけてやはをあき　文系
梅の国よりくまの奥より姫ゝろ　シノト
将門の石ハ高ん百ゝ石きたる　墨山
越田よりハぢよの下世ハ世ん　玉孝
持参と美を世所かぢりける　用布
青ヒのせね大キナぢらを墨子ゝ　シノト

けんでんなれへやどしい流を出き　　曳尾
見るの書籍いかすい布で製　　箕山
毛筆へちりこお筆とすりんぐろ　　曳尾
机汚の蛍　桂角のゆうよ蛍　　孤雲
爆でハヨ〳〵ひつひのよまつうもず　　里松
咲ゆるハ光南よ高ぶる宿町　　桂好
書の女こいつた白ト島よ　もず　　如雀
こうハ時ハかすうつ如灯ぐえる　　横好
お高の布ハべつうつ木へさし　　雲亭

蝶牛主場やりちりの節　白ち　　雨夕
奥岳到こみぶとはのまがるすち　　砥川
居ひ川きで坊ゆをやり　風　　箕嶽
赤あん橋ろくな黒のおぬ布　　砥川
大条二布でハうば屋で如り　　雨夕
毛源イぶ味ぢハ流さと加ちうう　　砥川
蘭竜　五帝既　川柳坪
武蔵井へよもぎ蓬ぶのうれうと　　桂雪
嵐よねれつハ七日の蛍金　　巾布
うるハしい主ふとうる文浮く　　箕山

月のろイ薬を作成ひとしろう　シノブ
夏ごずを室毋ふためはじめ　梅干
毒を梅酒和漢をかんきべ　蓋山
四斗樽のそこをぬくのやめふき　玉椿
長芋を下ゆを作て五月うり　玉章
せうぶ湯八けんちん湯へ玉いるゆう　巾布
中元を下女打朝こ島つてる　シノブ
尚光院・信稜・梅酒・島子・ぶ樽ゆ・下女
川柳球

川こしの湯ゆの車よ一方な　蓋山
五月毎こゝのいぬ梅ちう　シノブ
月ゝまーのゝ日寄りをわめゝ　玉椿
梅酒の用庚申をめしてある　如雀
入梅よ茶粥を一味うつてる　玉章
茶ゆ島子八波座ほどゝまぎ　如雀
毎ごゝ月りよきてちんきなり　蓋山
島子月洗子ゝづれなおてゝる　玉椿
いつゝりよげせぬ島子の六ゝのゝ　玉章
志んゝまぐゝまぐゝのゝたなる竹四ごでき　シノブ

二百ごさ長子いけなく成よけり　砥川
四郎のすき兵ふくこちらづほ　雨夕
清ふ橋を使ひかくあるこちあん　砥川
三度めハ昌平橋へ荷をとゝび　北崔
ちふかつてかべよ木ノ子をせじを　玉亭
いきすぎた下サいきすぐすで米をこぎ　仝
腑ねふハ毒おおびひすこなり　夜裏
枝坊さのねけがで蕎ふ橋を　北崔
をぢよさるなををきあ出ふ橋を　シヲト
ぬす人上ヶ世ゝでも堪えぬ　鳥山

洪長義ほらまかりあやまろ　横好
姉の長ぢのびしをを安斎あし　砥川
義後家へよ入れが五六人　仝
物茂ぢこハ仏かこ文盲さ　仝
だらられ用事橋を立てり　仝
傘とつかやつてる大あくし　ヤマキ
八郎よ志よよ橋頭であス安斎　長霧
能新ハらつこと上ヶ立よびこうてる　砥川
おけんをの邪ヶ告かくこあで賀代　北崔

人をたらつく初世帝めがるのこつき　　孫川
江戸をたらつ美巳江の弟子ハよ女　　如雀
やかくなどぶ帯つがてを泊ている　　雨夕
美理ヒる長子ヒ七ヶ多不ニされ　　玉東
けいせいよ史を北かけてのくへあし　　如雀
米元年永安州を小去さし　　玉東
ナ二百宗ふ千世ヶ横よんへ　　孫川
ヒのけつ脱きとのきれハしらだ　　仝
為庵すき　郭巨ト他名つけられる　　里松

北てのもよこは元ある使者の作　　雨夕
翁長ヶ羅小俊くすくなり　　里松
かこれの祝ち社よりぢ仕てヒすり　　如雀
ト廿ヒ板つこめて四ヶもあるなり　　里松
天の網ヒ男牧あでこつうまり　　玉嶋
うれのこるここハんへね三歩こ　　ヤマキ
川柳評
山虫子えねたえ祖のものかり　　雨夕
行男没芋逸をとて二千戈　　横好
美勇をろんじてをすつぷく　　如雀

後見のかつて在藩あやどり
言ホよたる子ハ[illegible]ち者をめち
あかるい弱の実ちりハ[illegible]く
そ[illegible]竜ちやや光ハ鶴のような[illegible]
敵山で板なごへを長子すり
禅尼の意思ハ一門のかつさなり
赤松でたつる大の石 [illegible]
後楽で後楽坊ハかつ[illegible]
玉まつへ[illegible]ハて彩道かいまはキ

長霧
如雀
シノブ
孫川
未学
里松
如雀
仝
シノブ

玉章評

国お友さハ板毎で美の為士を石
孝仍のこばん筆ハ[illegible]子なり
酒中玉を入て[illegible]ハ色をすする
江戸[illegible]ごんよあ[illegible]の下
為ホよたる子ハ[illegible]ち者を拾ヲ
有のまかさやこ下弦や伝作し
後ナ様で後楽坊ハあるくら
毎月のけよ[illegible]の色ハお来
立玉為よ書家なり竹字孫川

ヤマキ
箕山
孤雲
箕山
如雀
里松
如雀
孫川
雨夕

茶の桜ゝや坊主毎のたびよちり　撰好
彩雲を寸ゝ屋り車渦をじてたり　砥川
門の名でえりや風ゝ秋八月ひ　友裏
小の極楽で多代イ世七一　如雀
毎やどり清改を寄あひんのよさ　撰好
ちしの秋をけちなぞんなぞ嘉れ　雨夕
ちおれ矢つきて長子すけんん　シノト
ぢさん姫毎まゝ一つの海ぢさなり　ヤマキ
矢の細石男奴妻でとつゝまり　青嶺

市布評

春雨霧雨梅花の清香　梅　玉亭
紫を分るとうき世がおしゝ　柳　青嶺
梅や蕚をあらゝく九種蒔るこ　砥川
梅ゝる月よりやゝく酔がさめ　仝
梅が咲ケてよくこんりゃ仙蓬莱　シノト
を見でみををすゝるいくらし　砥川
けんを引る高遠梅をうみたと　如雀
市国市三四一のごふゝ　店　蕚嶺

甲斐のかしら九くすまれん　如雀
よこれぬい裾でせ命よいやゝれ　蕚山
者下りハなゝぬ古来風ごせけん　砥川
化ゝるゝ国来梅を見てり　仝
針灸を枝ケ示かゝ　仝
枝をゝゝてもたくいても一歩をん　やさき
屋らやゝらやゝとゝんぶはまを喰　香矢
ぢれつてへようと帝下をばつゝだた　砥川
下世蕚枝つとめて図ゝをゝるなり　里松

うぐゐ者まけバ下谷の廣小路　梅月
首をつらずと粹をつくると知し　未学
級日まへ屈でのくまを出きのめし　砥川

文日堂評

甲曽ゑ様紙自わた平さ　玉章
海老でも尤義ハ小き四ま　ヤマキ
めでゝさい歩毎で夷の冨士ゑる　仝
逢瀬をいゝて来ハ吸ひ茶　梅月
酒中茶をえて宝氏ハ世をすて　紙雲
小倉山でも寄三ハをねまこ坊　春夫

堅路の村毎山吹のぬちよはれ　孤雲
有ゝ者ゞ姫きれいなほんきん　玄蕉
陸ゝの皮あつく名家ゞ一首あ来　友惠
百首よも添作一帳神祇よみ　如雀
けいせいよ火をうちかけてのぶ〳〵　仝
仲の町斗ハにぎやかな秋七番　雨〆
つゝて行イ行をきかせる妙ゑち　如雀
風凰ハ恋者花をつれ仲の町　玄蕉
い〳〵女郎世上の餐よ名をのこし　シノト

吉水の道を蛇のあるかのごとくの揺ぐいつちかすゝろい　シノブ
七月五日廣瀬なかれる宇治の川　雨乃
あやどう清水を笠のひんのよさ　撰好
甲乃のゆしろうたくすますこ　姫崔
保文の月も和川をんの日なり　玉章
堂やかしこで茶をきんひ酒をさ　仝
ちこの歌をけちなゆきもれ　雨乃
拾系を生きつゝしの清水君ん　笠山

四倉めハこゝをはじみし梅のやう　巾布
坊を拾ナどころ夕夕ゝ　秋川
酒かつて風をけられることもなき　青嵐
さしぶでかいらんの当伸〳〵所　仝
姫いびりいとんや不ゆまいてかや　玉章
祝王風うでもあるめへと茶を云イ　撰好
雪踏ちとホ石川井りたづねてる　姫崔
二條中納言二風一のけ茶ゝ　撰好
傷君さへゆくよ島子まいてなや　姫崔

大一竟すでよりたえ侍板おと　　青葉
加ゝにんをして三百目為ゑする　　孫川
毛昌弘でつゝゝ賣て来り　　仝
その稼ををれたつせへと村子供　　ヤマキ
名よめでく打れる計りよりつこちる　　撰好
賜で市売ゆをそを打くゝ為ゑ　　シイト
名のみこいつ所ををゑよせず　　如雀
つれぞよ陸子のゝ雪ゆ揚ゑ　　孫川
ゆ加ゝさハ寿まをゝて絵ゝく　　ヤマキ

夕ゆき紅葉遠いまぢよ下女姿等　　シイト
麦畑ゝつ紅ますをよ明るなり　　箕山
ゆいつを半の角文字ゆゞみ文字　　戸尾

川柳

競べきそのをしかゝ茂の蓑　　青葉
和川の色よ加茂川ゝを見れる　　シイト
涂木を洲仁紅葉ハ色をする　　川布
ゝ尾よりまゝゝすゞれさ蓑ゝ在ゝ　　青葉
茶色のをいゝずゆ塩文洲すゝ　　里松

元禄の祭りで一角よりひつ先
あイ附仕候しるイ附つぶれ
そうあるもとおそいと重子拵メら形
綱の代のろうびる迄八為重生
ダイ七年 弁慶の級又八すこぶる二尺
おく寄毛髪を逆さまでつける
虎学よりかの神をこめて書
よしの九郎ぶつ附おぶひきたて
十五日に和光八しるお上ら会

雨夕 堀雀 末学 仝 深川 堀雀 末学 玉亭 深川

十一月 二百久義二十 評

九条 佛加 宗祖 因尾 月枝
乾什 亀貝 小丸 三九 志山
松風 吉武 吉蛾 百桑 豊馬
雪志 海北 紀山 井尾 長鶴
津徒 湖十 東横 風紀 年人
右於自宅相撲十二百久義仕
常之助厚 為弟教之者也

十二月二百餘
了河 皐波 田安 高稲
春壹 磨秋 不岩 之湘 田社
[illegible]
[illegible]
會宝丹
田 社中